PROJECT

手段としての動物と人とのかかわり ──共通した動物利用の論理を探る

文 卯田宗平

共同研究 ● もうひとつのドメスティケーション──家畜化と栽培化に関する人類学的研究（2016-2018 年度）

本プロジェクトの目的のひとつは、手段としての動物と人とのかかわりに着目し、さまざまな動物利用の事例を比較検討することで、人びとの働きかけのなかにみられる共通した論理を探ることである。

生業活動において利用される動物は、その目的の違いに応じて大きく 3 つに分けることができる。それらは、狩猟の対象、生産の対象、生業の手段である。狩猟の対象とは、我われ人間の日々の生活に必要な食料や物資を確保するために捕獲される動物のことである。生産の対象とは、肉や毛、皮、乳などの生産物を人間社会に提供する動物のことである。生業の手段とは、動植物を探索したり、捕獲したり、回収したり、農具や橇を牽引したり、人間を乗せたり、荷物を運搬したりする場面で利用される動物のことである。本プロジェクトで取りあげる事例は、このなかで生業の手段としての動物である。

問題意識

動物と人間とのかかわりに着目した研究は人類学や民俗学の分野において数多くの蓄積がある。なかでも人類学、とくに生態人類学の分野ではこれまで搾乳や去勢、群れの管理といった技術に注目しながら、人間が対象とする動物をいかに人為的な環境に取り込んだのか、人間にとって都合の良い性質をどのように獲得させたのかといった点が議論されてきた。

こうした議論において登場する動物の多くは、生産の対象としてのそれである。具体的には、ヤギやヒツジ、ブタ、ウシ、ニワトリなどである。これらの動物たちは人類の発展や生活の安定を考えるうえで重要である。

くわえて、現在、地球上には少なくない動物が人間社会のなかで手段としての役割を担っている。たとえば、潜水して魚を捕食する鵜飼い漁のウミウやカワウ、野にいる小動物を捕獲する鷹狩のイヌワシやハヤブサ、ハリスホーク、大型のコイやハクレンなどを捕獲するカワウソ、木々に登り植物を採取するブタオザル、狩猟活動のときに利用する狩猟犬、トリュフを探す雌ブタ、アユの友釣りで利用されるオトリアユなどである。

いずれの動物も飼い主が抱く「あの動物や植物がとりたい」という欲求を満たすため、人間の目となり、鼻となり、手となり、足となって与えられた役割を果たそうとする。ただ、こうした動物にかんしては、鷹狩などを対象とした個別の研究はあるものの、手段としての動物と人とのかかわりの事例を集め、それらを比較検討するという研究はなかった。そこで本プロジェクトでは手段としての動物に注目する研究者に集まってもらい、個々の事例間にみられる働きかけの共通性や固有性を検討することにした。

以下では、2016 年度に開催した研究会のなかから 2 つの事例を取りあげ、手段としての動物と人とのかかわりを具体的にみてみたい。

イヌワシを飼い馴らす技術

モンゴル国バヤン・ウルギー県ではアルタイ系カザフ人たちがイヌワシを使った狩りをおこなっている。カザフ社会では、馴化したイヌワシを狩りで利用する人たちのことを鷲使い（ブルクッチュ）と呼ぶ。この鷲使いたちには、イヌワシという猛禽類を捕獲し、それを手なずけるための豊富な知識が求められる。相馬拓也（早稲田大学）は「モンゴル西部アルタイ山脈における鷲使いとイヌワシとのかかわり」という発表のなかで、カザフ社会における鷲使いに着目し、調教の過程でみられる働きかけとイヌワシの行動特性を明らかにした。

水洗いした血抜き肉をイヌワシに与えることで、血に飢えさせて狩猟に駆り立てる（2011 年 11 月 24 日、モンゴル国バヤン・ウルギー県、相馬拓也撮影）。

アルタイ系カザフ人の鷲使いはメスのイヌワシのみを狩りに利用する。そのイヌワシは巣から捕えた幼鳥（コルバラ）を馴化する場合と、罠などで捕獲した成鳥（ジュズ）を馴化する場合がある。経験豊富な鷲使いは、前者を好んで馴化する。

鷲使いによるイヌワシの馴化は「ウズゲ・ユレトゥ」とよばれるが、そのプロセスは大きく以下のように分けることができる。(1) 捕獲したばかりのイヌワシをウルガックとよばれる不安定な据え縄のうえにおく。それは、イヌワシを不安定な縄のうえに乗せることで意図的に疲労を感じさせ、人間に対して従順にし、捕獲後の人工的な給餌をより容易にするためである。(2) イヌワシに水や栄養価の低い餌を与えるこ

とで空腹にし、減量させる。(3) 空腹になったイヌワシの近くに餌をおき、人間の近くで捕食することに馴れさせる。(4) 鷲使いは右手に皮革製の手袋をし、イヌワシをそのうえに留まらせて人工的な給餌をおこなう。(5) 飼い主からの給餌に馴れたイヌワシに目隠し帽を被せる。(6) 離れた場所にいるイヌワシにウサギやキツネの肉をみせることで飼い主のところまで呼び戻す訓練をおこなう。(7) キツネなどの毛皮で作った疑似餌を使い、それを追いかけるような行動特性を獲得させる。(8) 狩りのときに利用する馬に馴れさせる。鷲使いは、以上のプロセスを経て馴化したイヌワシを連れて出猟する。

こうした一連の馴化技術のなかで重要なのは睡眠制限と食事制限である。鷲使いはイヌワシを眠らせないようにして意図的に疲労を感じさせたり、目隠しをしたりすることで従順にさせる。その一方で、イヌワシに食事制限をすることで満足感を与えないようにする。これは、イヌワシに脂肪や血を多く含む肉を食べさせると餌に満足してしまい、狩りへの闘争本能を忘れてしまうからである。このように鷲使いは野生のイヌワシを馴化させつつ、闘争本能をも失わせないような技術によって、狩りを成り立たせているのである。そして、彼らはこうした知と技法を通じて、イヌワシとともに生きる文化を築き上げてきたのである。

飼育するハリスホークに対して、人間からの介入に馴れさせる。水浴びをしているようす（2012 年 9 月 20 日、福岡県北九州市、南香菜子撮影）。

鷹に対する感情のコントロール

日本における鷹狩は 1600 年以上の歴史があるとされる。日本では鷹を扱う技術のことを放鷹術とよび、公家や将軍らに仕えて鷹狩に使う鷹を調教する職業のことを鷹匠という。日本にはかつて放鷹術にはさまざまな流派があったが、現在おもに活動している流派は諏訪派と吉田派の 2 つである。

南香菜子・竹川大介（ともに北九州市立大学）は、「人はどのように鷹を理解するのか──鷹狩の調教における『慣れ』と『狩り』のプロセス」という発表のなかで、鷹を飼い馴らす技術を明らかにした。発表者のひとりである南は諏訪派の鷹匠のもとで放鷹術を学びながら鷹狩で使われるハリスホーク（以下、鷹と記す）の調教を約 2 年間続け、狩りを成功させるまでのプロセスを記述した。そのうえで、自らが調教のなかで鷹をどのように認識し、その解釈が鷹との関係の構築にいかに影響を与えたのかを分析した。

鷹は飼い主とのかかわり方によってまったく異なった行動特性を獲得する。こうした特徴を持つ鷹の調教においては、日を追うごとに人間に慣れてしまう鷹に対して、鷹のハンターとしての性質を失わせないような訓練を通して小動物を狩るための行動特性を維持させる必要がある。発表者は鷹に対する調教のプロセスを大きく慣れと狩りという 2 つの志向性から分類し、個々の働きかけを整理した。そのうえで、調教の過程では慣れと狩りの双方のバランスを調整することの難しさが明らかにした。

とくに、鷹を調教するうえで重要なのは、鷹をいったん人間とともに行動できる状態にまで慣れさせ、それができた後に人間から離し、鷹の主体性に任せて狩りをおこなう関係を構築することである。こうした働きかけを発表者は「自立の再構成」という。鷹の自立を再構成させる過程では、鷹の狩りにかかわる本能をも利用し、その野生性をいかに残した状態で人と行動できるようにするかという、人との微妙な距離を作り出すことが重要となる。

また、鷹の調教の過程でもうひとつ重要な点は、鷹匠自身の鷹に対する感情をいかにコントロールするのかということである。鷹とのかかわりが深くなると、人間は鷹に対して愛着が形成される場合がある。そうすると、狩りのときに鷹が怪我をしたり、事故に遭遇したりすることを恐れ、鷹に対して過保護になってしまう。これは結果として鷹の狩りへの欲求を低下させ、狩りにかかわる本能を保たせる機会を失わせる危険性をはらんでいる。つまり、狩りをおこなう鷹を調教するためには、人間が鷹を信頼し、鷹への愛着から人間が自立することも重要なのである。言い換えれば、鷹狩の調教の過程では、人間が鷹に対する愛着をコントロールすることも重要であることが明らかにされた。

以上、鷲や鷹を用いた狩りを成り立たせるための動物利用の事例をまとめた。上で示した鷲使いや鷹匠たちの働きかけには、いずれも狩りと慣れという 2 つの志向があり、その双方を個々の局面に応じて使い分けていることがわかる。つまり、彼らはイヌワシやハリスホークの馴化を進める一方で、野生性の保持にも留意し、その両者のバランスを調整しながら狩りを成り立たせているといえる。こうしたバランスを調整するというかかわり方は、手段としての動物と人とのかかわりにおける重要な点といえるのではないか、というのが本プロジェクトのひとつの見解である。今後の研究においては、生業の対象としての動物にも着目し、個々の事例における働きかけを一つひとつ整理し、比較することで、上記のバランスを調整するというかかわり方についてさらに明確にする予定である。

うだ しゅうへい

国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授。専門は環境民俗学、東アジア地域研究。著書に『鵜飼いと現代中国』（東京大学出版会 2014 年）、論文「鵜飼い漁誕生の初期条件──野生ウミウを飼い馴らす技術の事例から」（『日本民俗学』286 号、2016 年）などがある。